令和５年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部　佳作
（防災砂防課長賞）

「　土砂災害と向き合う　」

岡山市県立津山中学校　３年　北村（きたむら）　悠真（ゆうま）

皆さんは土砂災害がどんなものかを知っているだろうか。

土砂災害とは、大雨や地震で斜面崩壊、地すべり、土石流などが発生し人の生命や財産を奪ってしまう災害である。近年、ニュースでこの言葉をよく耳にするようになった。今年６月から７月にかけて全国的に線状降水帯や集中豪雨が相次いで発生したことにより、深刻な被害が生じたこともあった。土砂災害は１年に約千回も起こっているのである。大規模な土砂災害が起こった年では死亡・行方不明者が 161 人、家全壊が 415 戸もの被害を受けている。また、最近になると大雨が増え、土砂災害は以前より増加傾向にある。しかし、被災者数は減少傾向にある。これは日本が土砂災害の被害を重要視し、対策や設備を強化しているからではないかと考えられる。よって、自然災害であるこの災害は人の手で防ぐことができると僕は思う。

国が土砂災害に備えて行っている取り組みの１つが「砂防」だ。砂防には土砂災害をなくし、安全で豊かな生活を守り、なおかつ、将来にわたって土砂災害の危険性を少なくするという目標がある。令和元年 10 月 12 日台風 19 号により発生した土石流を受け止め、下流の人家や市道等への被害を防いだという実例がある。このようにみんなを災害から守ってくれる砂防だが、川から海への養分やミネラルの供給を妨げ、海が痩せてしまい、海草や魚や貝などの生育を妨げ、ひどい場合は、「磯焼け」といって生物のいない死んだ海になってしまうことがあるという問題がある。人の命も大事だが、環境を守ることも大事である。砂防は毎年増え続けており、砂防にとらわれずこの２つのどちらも守れる方法を見つけてほしい。

砂防ももちろん壊れてしまうことがある。理由として経年劣化や災害による決壊がある。また、田舎の山奥の家なんてどうだろう。例として、僕のおばあちゃん家を挙げてみよう。まず近くに砂防ダムはなく、家は山に囲まれており、川もたくさんある。大雨が降ったとき、地震が起きたときに土砂崩れや崖崩れが起きてしまうのだ。そんな緊急事態に備えられる、そんな緊急事態から逃れることのできるのは、自分自身や周りの人たちの力だ。自然災害をせき止めるなんて大規模なことは僕たちにはできない。しかし逃げることはできる。

家族でできることの１つとして非常用持ち出しバッグを用意しておく必要がある。この中には、なにか特別なものを入れるわけではない。日用品やラジオ、貴重品を準備しておくのだ。僕も非常用持ち出しバッグを常に用意している。実際に使った経験はないが、台風が近づいてきたときに近くにあると安心感がある。日頃から見やすく、近くにおいておくことが大切だと思う。他にも、実際に地震が発生したときのことを想定して、各自ですべきことや避難方法、連絡方法などを家族で話し合っておくことも大切だと思う。これは土砂災害だけに大切なことではなく災害全般で大切なことである。話し合いで決めることは役割分担を決める、危険個所をチェックしておく、安全な空間を確保しておく、非常持出品のチェック、防災用具などの確認、連絡方法や避難場所の確認だ。これを決めておくことで生存率や家族と再び会える可能性が上がる。

「家族とのコミュニケーションを怠っても変わらねーよ。」という人もいるだろう。土砂災害ではないが津波で、家族間でのコミュニケーションを日頃からしていなかったために死亡させてしまったという実例がある。その死亡してしまった人は引きこもりだった。生き残った一人の男性は失った家族への自責の念を今も持ち続けているという。自分がもっと家族の問題に向き合っていれば、運命は変わっていたかもしれないと思い続けなければいけないのだ。

僕はニュースでよく川を見に行って死亡してしまう高齢者をよく見る。親に、「川の近くには行くんじゃないよ。」とよく言われるものだ。どんな状況なのかなと気になるのもわかるが自分を守るためにも災害の前兆を察知し、逃げて安全を確保しておくことが大切だ。前兆として挙げられるのが、小石がパラパラと落ちてくる、地鳴り山鳴りがする、腐った土の匂いがするなどだ。僕

はこれらのことを察知したときにすぐに逃げるのではなく、近隣住民とコミュニケーションをとり、できるだけ被害を抑えることが大切だと思う。

　これらが僕たちにできる最小限に被害を減らす手段のはずだ。国もこれからも対策を続けてほしい。これ以上悲しむ人が出ないように。